

№ 23・24  
 合併号  
 1974.  
 1. 15

# 岐阜の博物館

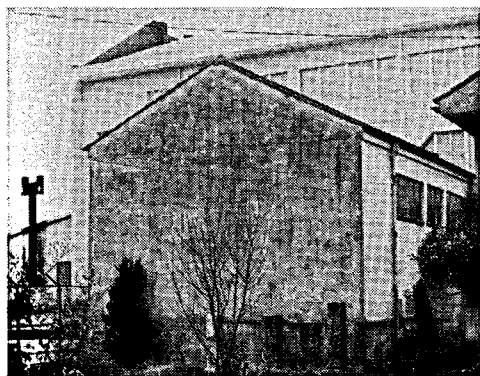
編集兼発行  
 岐阜市岩戸花月町 2の1  
 濃飛甲冑研究所内  
 岐阜県博物館協会  
 発行責任者 吉田幸平  
 振替 名古屋 28716

## 館・園紹介 № 21

天下分け目の

### 関ヶ原町立郷土館

〒503-15 不破郡関ヶ原町関ヶ原 3132  
 TEL (05844) 2-1288



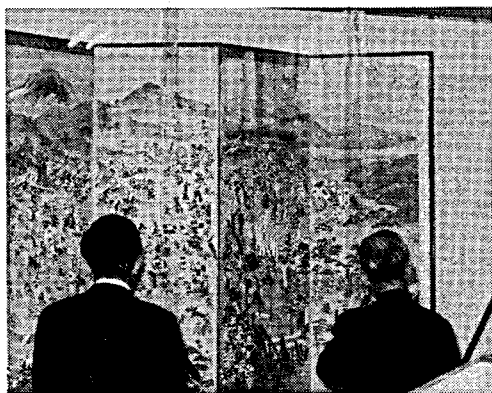
※ 写真上、郷土館全景。右、眼前に戦いが展開しているような合戦の大屏風。

関ヶ原は、今より370年前天下分け目の関ヶ原合戦が行われたところであり、また交通の要所として不破の関が置かれ、宿場としても栄えた由緒ある町である。したがって、歴史上の貴重な資料が多く残っていて、それらを一堂に集め昭和30年に開館されたのがこの郷土館である。

館内に一步入ると、安倍能成自筆の額「考古開新」が目止まる。正面にある狩野梅春の合戦の大屏風(模写)は、戦場の地形や人物が縮図的に、しかも精緻に描かれており、眼前に戦いが展開しているようで実にすばらしい。

中央のガラスケースの中の関ヶ原軍記・実記・始末記(写本)や関ヶ原本陣間取図、関ヶ原宿軒並図などは、この町の昔の姿を彷彿とさせる。展示室両側のガラス棚には、家康の出した禁制、家康が敗走した小西行長を捕えた竹中家に送った感状などが見られ、勝者と敗者の対照が興味深い。

国道改修工事の折に出た土器類、不破の関跡から発掘された瓦、当地出身の高僧無難禅師自筆の書状、徳川幕府の高札、その他古い武具、民具など200余点にのぼる資料は、すべて価値



のあるものばかりである。

全国からの参観者も多いというが、現在は温度や湿度の調節もされず、管理が十分でない点が見られたのは、大変に惜しいことである。目下、この町の歴史と伊吹山の自然をテーマにした博物館の建設が計画されていると聞かすが、早急に立派なものを完成し、資料の効果的な展示と安全な保管方法を工夫され、郷土の文化センターとしてより発展されることを期待する。

歴史を秘めた史跡の町、関ヶ原に残された香り高い文化財の数々、この国民・県民の宝物を、大衆の知的レジャーに充分活用させ、人々の心を豊かにし、精神を向上させることこそが、今叫ばれている時代転換の柱である。(文・柴田)

## 史話・伝説の山国に生きる地方集古館

飛騨集古館館長 土田吉左衛門

国道158号線は乗鞍の秀峰を間近にえんえん蛇行して長野県に通じ、ドライバーは日毎に増え、半世紀前のことを思い浮かべるとただ感無量である。

このため沿線には諸施設がむらがり立ち、わが集古館を始め飛騨大鐘乳洞・琴水園・朴の木平スキー場、福地化石館・平湯民俗館・乗鞍スカイライン等々それぞれ万全の施設をもって要望にこたえている。

### ① 付近のながめ

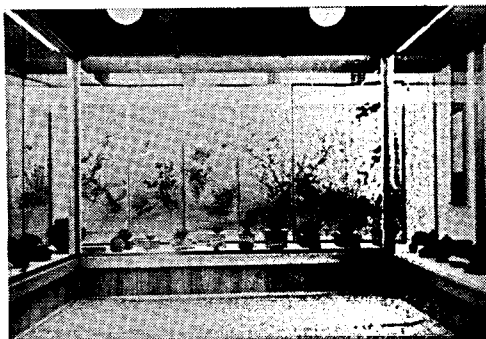
集古館は俗称「血の木」の下に立つ古色蒼然たる昔ながらの建物である。「血の木」というのは県指定の天然記念物で、県下最大のクロベで高さ30m、幹の周囲は6.3m、地上2mの所で三枝にわかれ、その眺めは雄大である。

延元元年(1336)郷土堤殿代が城を作って住んでいたが、応永18年(1410)南朝の臣飛騨国司姉小路尹綱とよしに味方し、北朝の足利氏に亡されて一家離散した。一族のうち生存者はかれの屋敷跡に首を埋め「血の木」を植えたという。かれの亡霊はこの木に宿り、枝や梢を傷つけたりすると幹から血がにじみ、必ずたたりをしないといい伝え、後人は一族の冥福を祈るため、その木の下に祖霊社を建てて供養した。

また軒を並べて右隣りには「女郎鐘」で有名な浄願寺がある。かつて永井啓夫氏の長唄「吉原鐘縁起」で全国的に紹介されたが、その筋はざっと、次のようである。

浄願寺の若い僧純慧じゆんけいは、釣鐘勸進のため江戸へ出たが、ふとしたことから吉原の遊女若紫と馴染み、浄財を使い果たした結果、ついに二人は向島堤で心中を計った。義侠に富んだ吉原の連中はこれを情れみ、鐘を鑄て送りとどけた。いよいよ鐘供養の日、一天かき曇って純慧の亡霊があらわれると、無事によみがえって若紫は紅葉の一枝をかざし、法の道を説いて成仏を祈る——すると純慧の姿は鐘楼にかき消え、すん

だ鐘の音が流れるのであった。上田秋成の雨月物語を読むよりである。



### ② 集古館

さてこれらの環境に恵まれた当集古館は、もと地方の豪農松井彦左衛門氏の旧宅で、天保15年(1834)の建築である。殆んど補修がなされず、したがって改築・増築・移転などしていないのがとりえて、当地方における幕末ころの農家生活の実態を知るのに便利である。

### ③ 館の内容

当集古館はその名のように「古き」を集めることを目的とし、展示の内容は民俗資料と考古資料とに大別することができる。

民俗資料は主として江戸時代からの民具・農具・生活什器はては武器・彫刻・絵画などにいたる約500点を集め、山作業では飛騨工の歴史を物語る山男の生活用具など、いまはすべて過去の遺物として、当地の人びとにさえ記憶に薄れているものなどを展示し、見る人びとをして昔懐しい思い出に浸らせる。

考古資料では縄文式土器・弥生式土器・須恵器など各種の土器また石器類・古墳時代の出土品。漢・唐・高麗ならびに藤原時代の古鏡など1500点を収めている。

これらの考古資料は四十余年前、故小川栄一先生の研究に私淑し、以来こつこつ集めたもので、いまここに展示して皆さま方に見ていただくことは、全く予期しないことであり、まことおこがましい限りである。(完)

# 美濃の山茶碗 ≡≡≡ セミナーより ≡≡≡

小泉小学校教諭 田口昭二

美濃焼の起源がどこまで遡るか、ということ  
は、美濃焼を研究するものにとって大層興味深  
いことである。それでここ十数年来、美濃焼の  
研究者やサークルは、踏査と研究を重ねてい  
るのである。そして、最近そのおよそを知るま  
でになった。

古い方は、奈良時代の須恵器窯から平安時代  
の末期の灰釉陶器窯があげられる。つづいて、  
鎌倉時代を経て室町時代までの山茶碗窯である。

これらの発見によって、美濃焼は室町末から  
はじまったという、これまでの考え方を一新し  
たのである。そして美濃焼の中世陶器の全貌が  
明らかにされたのである。

しかも窯業の産地的要素をもってくるのは、  
どうも平安時代末期になってからで、その窯数  
がぐんと増加してくるのである。これは需要と  
供給の問題に関係してくることであるが、当時  
の需要層が一般大衆までにおよんだことを物語  
っている。このことは、平安時代末期の灰釉陶  
器を焼成した古窯址群が、この美濃古窯址群だ  
けではなく、広く美濃窯をとりまく尾北窯・瀬  
戸窯・猿投窯・常滑窯・握美窯・美濃須衛窯・  
中津川窯等でも焼成していたことで、うなづけ  
るのである。

このように、美濃の窯業が産地的要素をも  
った、平安時代末期の灰釉陶器窯の、ある時期  
から山茶碗窯が並行して焼成されはじめたと考  
えられるが、この移行期が、現在では、灰釉陶  
器からそのまま移行したと思われるものと、あ  
るいは尾北方面から再伝承してくるとい  
う考え方が、同窯期と思われる山茶碗窯の製  
品からうかがえるのである。

そもそも「山茶碗」といわれる陶器は、美  
濃焼きの中世窯業を代表するもので、山茶碗  
を焼成した全時期をとおして、灰釉陶器と比  
べると、碗皿に手ぬきのみられ、まず初期を  
のぞいては、施釉がなく、碗は腰の張りがな  
くなって、「逆

八の字」状に開き、付高台はより土を貼付し、  
かならずといっていいほど、「もみがら」圧痕  
が付くようになる。これは、成形後、もみ  
がらの上に置いたことによって残ったもの  
と思われる。皿については、小形化して、  
付高台がなくなり糸切底のまま成形されて  
いる。

このように成形上の手ぬきは、いわずとし  
れた、大量生産化と、成形のスピードア  
ップをねらったものであろう。しかも、  
山茶碗の中期頃になると、種々の器種も、  
わざわざ別のものを成形していくという  
のではなく、同じ成形の碗形から片口碗・  
オロシ碗、あるいは蓋などを製品化して  
いるので、このことからみても量産に  
つながるのである。それでは、山茶碗の  
時期は、もっぱら粗製乱造のものばかりか  
といえ、決してそうではなく、少数では  
あるが、碗などの精製品や短頸壺、それ  
に末期には、施釉された、灰釉の四耳壺  
さえ出現するのである。

また、この山茶碗の時期は、中国から  
施釉陶器の焼成法が伝承されてくるので、  
どこかの窯でそれらのものが焼成されて  
いるのであるが、美濃においては、その  
兆候は、まったく末期にならないと現  
われないのである。しかし、このことは、  
いまだじゅうぶんな踏査がなされてい  
ないので、はっきりしないところもある。

さて、末期の山茶碗窯は、もはや付  
近の窯で、古瀬戸や灰釉陶器等の施釉  
陶器を焼成しているので、窯数も減  
少し、まったく小型化した碗・皿にな  
ってくるのであるが、その終末期は  
14世紀末から15世紀初めにかけて  
のもと考えている。

推定年代については、まだまだこれ  
からの問題であろうが、この頃に瀬  
戸からの工人移動がはじまり、その  
後の志野・織部の出現になるので  
ある。しかしこの瀬戸山離山も、それ  
以前については、瀬戸とか今井とか  
美濃とかいうのではなく、その窯群  
の内容はかなりどちらへもいりく  
んでいたであろうし、はっきり分けて  
考えて

いくのは、やゝ無理ではないかと思  
うのである。

山茶碗の編年は、美濃の場合5窯期に分けら  
れ、その各窯期をあげるとつぎの表のようであ  
る。

美濃古窯の山茶碗編年

	窯 期	時 代
第1窯期	西坂1号窯期	平安時代末
" 2 "	丸石3号窯期	鎌倉時代
" 3 "	窯洞1号窯期	
" 4 "	白土原1号窯期	室町時代
" 5 "	大洞東1号窯期	

以上5窯期に分けられ、その窯期の製造品種  
と製品の特徴を述べてみると、およそつぎのよ  
うである。

#### ① 西坂1号窯期

この窯期は、まだ灰釉陶器のなごりを残し、  
碗と皿は、まったく灰釉陶器の器形そのままで  
あるが、高台がの断面が直角三角形をしている  
ものと、ふ厚い長方形をしているものがある。  
なかには施釉のあるものや輪花を施したものも  
あるが、灰釉陶器にみられるような多種多様な  
器種は認められず、特に皿にいたっては、小形  
化した丸皿が多くなり、段皿や綾皿はまったく  
なくなるのである。他には、大平鉢や壺類があ  
ると思われるが、現段階でははっきりしない。

#### ② 丸石3号窯期

この窯期になると、主体は碗・皿となり、大  
平鉢や碗を利用した片口が焼成されている。

碗の成形は、この窯期初めにはまだ灰釉陶器  
の面影が残っているが、後期になると大ぶり  
ではあるが、「逆八の字形」に開く厚手の、いわ  
ゆる山茶碗形になってくる。高台はどちらも付  
高台であるが、厚手のより土を貼付させたもの  
で、「もみから」圧痕が残っている。皿は小形  
化し、先行窯期の様式を残してはいるが、付高  
台がなくなり糸切底となる。胎土はあらめの粘  
土を用いている。

#### ③ 窯洞1号窯期

この窯期は、碗・皿が主体であるが、若干小  
形化してくる。碗はまだ厚手であり、内面底部  
は丸く凹んだ成形で、付高台には「もみから」  
圧痕がつく、小皿は先行窯期の様式を残すが、  
内面底部は丸く凹んだ成形である。また他の器  
種については大平鉢が知られている。

#### ④ 白土原1号窯期

この窯期が、美濃の山茶碗窯の全盛期と考え  
られ、窯数が一番多く、その器種も多様である。

例えば碗成形後、片口をもうけたり、オロシ  
目をつけたりして用途を変えている。全体に薄  
手になり、内面底部にはひきしめのための指圧  
痕が認められる。小皿も薄手になり、内面底部  
を扁平に成形後、その中央に指圧痕が残っている。

他の器種には小形の短頸壺やオロシ鉢、大平  
鉢、陶丸、それに先きほども述べた、灰釉の皿  
耳壺がみられ、器形こそ瀬戸にヒントを得てい  
るようだが、その釉調や押印の技法は美濃工人  
の独特な創造と思われるのである。

#### ⑤ 大洞東1号窯期

この窯期は、山茶碗最後の窯期である。器形  
は、小形の浅碗と小皿に限られるようになって  
くるが、これは、すでに瀬戸より古瀬戸系の窯  
がはいり、再興灰釉陶器や古瀬戸などの施釉陶  
器を焼成するようになり、それが一般向きとな  
ってくるため、わずかに残存する窯となってく  
るのであるが、おそらく用途のりえから、この  
ような浅碗や小皿になってくるのであろう。

他に小形の短形壺もみられるが、先行窯期と  
同類のものと思われる。

以上、山茶碗についての概略をのべてきたが  
限られた枚数のため、山茶碗の実測図や写真を  
のせることができなかつたのが残念である。

これで、美濃の山茶碗のすべてをのべたわけ  
ではないが、今回は編年に焦点をあててみた。  
また、山茶碗の販路の問題、工人の問題、各窯  
期ごとの窯数の問題、印花技法や灰釉陶器との  
関係などあるが、またの機会にゆずりたい。

## 地方にとって、博物館大会は何であるか

日本博物館協会評議員・岐阜協顧問 広瀬 鎮

### <はじめに>

この10年余大会にかかさず出席させて頂いているが、毎年戻ってきて思うことは、「これだから、大変だ」という実感、それも多くの国、公立博物館のそれぞれの専門家の方々とお会いし、お話しあったせいでもあろうか。私立博物館の道の厳しさをいつも痛感させられている。日本の社会が、これほどの試練に立たされている時は無い。市民としての我々、日本列島にすむ人間としての私達が、今日やらなくてはならないことは、今こそ、日本の叡知と人類愛を高くうたいあげ、地球環境の中で人類の生存の方向について語り合わねばならない時にいたっていることである。「人類に奉仕する博物館論」を論じたのは昨年の北海道大会であった。博物館こそは、人々の物・心の飢えをみたす社会の病院なのではなからうか。互に関連し合って、助け合ってつくられる「物」に関する哲学が今こそ必要となっているのである。

### <役員会にて>

11月11日10時から兵庫県立近代美術館で、理事会・評議員会合同の役員会が開られ、①昭和47年度事業計画並びに才入・才出決算書承認について、②定款の一部改正について、③昭和49年度よりの会費増額、④公立・私立博物館長会議について等の報告・協議がなされた。

強化実行委員の一人としてこの協会強化策定に加わった立場からみても、定款を変え、大いに博物館事業を進展させるべきだとの基本的な立場を支持するものである。多くの会員の真剣な討議過程を知っているものとして、それぞれの立場で日博協を育てて行こうとしている実に多くの熱情の所在を信じている。今後事業を活発にするために、地方活動を重視し、諸部会の組織に新しく個人部会を設けたり、支部組織

の強化に大いに熱意を示したことは喜ばしい。強化特別委員会や実行委員会の協力が、やがて具体的に効力を発揮するにちがいないが、何といても、地方において日々博物館問題にとりくんでいる地域毎の博物館協会組織の果す役割りがもっともっと重視されねばならないことを痛感させられた。

### <通常総会>

11月13時から開催された総会でも役員会同様の話題が熱っぽく討議された。年間事業の多彩な内容にくらべて事務局事務員の給与や、身分保証の乏しさに誰もが心配の気持をもった。充分な人的保証をもった上で事業をくみたてなければ将来性はない。しょせん博物館事業は人により、人の和の上になりたつからである。定款改訂案を総会総意で議決した後、49年度事業計画の方向と問題点もあわせて協議されたが、事業企画案にはみるべきものがあつた。勿論会費値上げによる事業充実を予定しているが、協会事業としてとりくむべき方向はすべて打出されてあつた。要は「事務局」次第という声も聞かれた。岐阜県博物館協会の今日の隆盛はすべからず事務局のみごとさにあり、加盟会員1人1人が事務局の仕事を担当してやまない熱意の成果であることを幾度か思いおこしたことである。

### <大会提案>

大会は12日の開会式にはじまり、全体会議、映画、知事レセプションと多彩な初日の行事から着実に実行されていった。もっとも個々の応答などの場合には何かとトラブルが生じ、この種事業運営のむづかしさをかいまみた。全体会議での、埼玉大学新井重三氏の「一次資料を創る博物館と、資料の伝達を主目的とする博物館」をめぐる問題提起は参加者に多くの問題意識をなげかけた。

それぞれの博物館における博物館研究のあり方が反省される好話題でもあった。

つづいて、大阪市立自然史博物館長の千地万造氏による「我国における博物館の発展のために」と題した話題提供は、今年大会の大会決議提案となり、最終日の全体会議で決議された。①国公立博物館の適正配置、②文化財、自然資料の現地保存、③私立博物館の助成、④学芸員の地位と質の向上、⑤日本博物館協会の強化、これらの諸点をめぐって博物館は多くの問題をかかえながらも一致協力して問題解決のため一歩ずつ前進しなければならぬのであるが、千地先生ならではの熱っぽい提案であった。

#### <分科会>

大会2日目の13日は記念講演と現地研修がおこなわれた。14日は第1から第5までの分科会が開催されたが、私は第2分科会(自然史博物館・動植物園・水族館部会)に出席したのでその様子を報告する。ここでは、五つの報告がなされたが、特に興味を持たれたのは上野動物園からの「盲児の動物観察について」の研究報告である。盲児に対して生きている動物をどのように観察させることが望ましいか、同園の遠藤悟朗氏の動物園教育へ寄せる努力は大きい。盲児が動物を認知するにふさわしい動物種をえらび可能な範囲で体系化することによって広く各種

動物の理解に発展させるようにしたいと遠藤氏はむすんだ。神戸市立森林植物園、神戸市立須磨水族館、宝塚動植物園等の研究発表は、当分科会の特色を性格づけるものであった。博物館それぞれの運営の背景、専門職員の意識などによってかくもバラエティにとむ研究分野があらわれるものかと感心させられたことである。モンキーセンターから、「創造的博物館教育としての発見学習 — 教材開発における問題点 —」が発表された。

#### <あとがき>

吉田幸平先生と私は、岐阜までの帰路、大いに大会論を、また博物館学をあくことなく、諸々に論じながら戻ってきた。果して、地方にすむ我々にとってこの大会は何であったのであろうか。有益な会合には違いない。それでいて、何か欠けていたような気がする。それは私には一つのこだわりがあるからかも知れない。全日本的な社会教育のため施設のすべてを集めた全国大会がなぜ、ひらかれないのであろうかということである。図書館、博物館、公民館、青少年センター、少年自然の家など、すべての生涯教育施設と機関は、共通の問題を話しあう必要があり、もうそんな時がきているのではなからうか。「物」と「人」とを結びつける「心」の教育の総合化をわたしたちは忘れてきてはいないであろうか。

### 第3分科会(歴史・考古・民族博物館部会)の概要

岐阜県陶磁器陳列館長 古川 庄 作

先ず第一に「伊丹市立博物館の一年間の活動」と題して、和島恭仁雄氏(伊丹市立博物館)が、昭和41年国の指定史跡となった伊丹廃寺跡の出土品、及び「伊丹市史」の編纂過程で収集された資料の保存と継続研究の要望が、資料館設立の構想となって結実したこと。その後更に自然史部門を含む総合博物館の形となって現在に至っている、設立から一年間の経緯を述べ、活動の現状としては、開館以来、常設展示「伊丹の自然と歴史」を通じて、市民に何を還元する

かについて努力し、特別展、講座等でもあくまで地域に密着したテーマを採りあげるようにしている外、学校教育との連携を重視し、毎年学習参考資料展を開催しているとした。

又問題点としては、学芸員の経験が乏しいため、あらゆる作業が試行錯誤のくりかえしであると反省し、予算の不足は収蔵庫の棚さえ完備せず、資料の基本的な整理にも支障をきたしていると訴えている。

将来への展望については、急速な人口流入の

伊丹市で、住民の生活環境が大きく変わりつつある中で、地域の歴史・文化遺産を正しく保存・記録すること、更に一層研究機関としても充実を計り、地域文化の向上に寄与したいと述べられた。

第二に、「歴史意識と共同学習 — 文化の自主的創造の場」と題して、後藤和民氏（千葉市加曾利貝塚博物館）が、歴史科学博物館は、吾々に過去を如何に生きたかを提示することによって、未来を如何に生きるべきかを利用者と共に学習する場であるとして論をすすめられた。

国指定の29の貝塚遺跡、縄文式土器時代全期間の遺跡をもつ千葉県では、土器形式を重視した考古学的論及がいかに強いのか。そしてそれは、発掘資料によるつぎはぎだらけの展示になっているが、それでよいかどうか。又それが単に展示効果をたかめるためのみに終わってはいないかどうかと視て、土器形式中心主義の反映がいかに考古学展示を面白くないものにしていくかにふれている。土器をもっと本質的にとらえるには、どうしたらよいのか。

従来土器は、便宜的な仮説容れものとして、其の形態・文様を云々されて機能を類推し、煮沸用・貯蔵用と考えているが、果して真実そうしたものであったかどうか。学界の権威でなくて、実感・実験的な根拠をもっているかどうか。

完形土器は勿論、或は又数千年の風化をうけたものでは勿論実験不能であるが、過去数年間に亘って実施して来た「土器作りの会」を通じて、千葉周辺の粘土丈では土器の成形困難、収縮大をどうしてもmixしなければならぬことから、土器の流通は土器形式と共に、人間集団をも流通したことを考えねばならぬことにつながった。土器製作の技術研究が、複製土器を作ることにより、土器の機能を実験すること、それがいかに文化を向上させたかを識ることが出来たか。そして土器の真の遺産としての価値が何であるかを求めるべきでないかと論をすすめられて、土器の再現性追求者は、機能の中身を

こそと考えるか、どうかすると形・文様・遺物としての売品を作る複製者にまかされているがそれでよいかどうか。学界の権威・考古学者による仮説で終ることなく、又便宜的な仮説から逆に類推することが、極めて危険であるかについて論ぜられた。

第三に、「但馬地方における資料館の現状」と課題として、中村典男氏（村岡民族資料館）が、近年、市町村レベルでの郷土資料室・郷土館・民族資料館等の新設が顕著である。昭和42年、兵庫県教育委員会で楽しい街作りから文化財を愛する街をと目指して、全町的に自治会組織を通じて民具の蒐集1000点、古文書1000点、考古資料500点を目標としたが、過疎による離村現象が拍車をかけてそれぞれ3000点、2000点1000点と蒐集されて来た。

学校統合による廃校舎を資料館とし、館長非常勤名誉職・無給の他職員1名予算年間30万円、但し人件費別で現在運営されている。然し町長が変れば考え方も変り維持管理が大変であり、散失の恐れも又大きい。

地域内の資料の一括保存こそ大切だが、最近研究者の間で問われている「資料の現地保存という現地を人員・設備等の点から市町村規模より府県規模のものが適当」について特定のもの、例えば、但馬地方山村の民俗資料のうち、1.あかり関係 2.蚕養関係 3.炭焼関係 4.木地師関係の他はこれに同意というを説かれた。

第四に、明日の文化創造への基礎、相蘇一弘氏（大阪市立博物館）は、本大会のテーマ（明日の文化を創造する博物館活動一人間性の回復をめざして）の基盤に先ず資料を大切に、次いで資料をもっと活用してゆくように、最後に積極的に利用者との交渉をもつことがこの趣旨の一部を形成するのではある。

先ず凡そ人間の創造活動は、過去の発展経過を無視してはあり得ない。継承的發展であれ、否定の上に成り立つ創造であれ、過去の文化所

産を十分に消化してこそ可能である。

ところで博物館は、単なる過去の遺物ではなく、その館の設立目的に合って淘汰された資料を体系的に収集し、保管し、展示し、調査研究して一般の利用に供する任を負うものであるから、既にその任務の遂行によって「人間への奉仕」を行い、「文化の創造」に寄与している訳で、改まるまでもなく正にその本来の任務を果たすことこそ「明日の文化を創造する博物館活動」につながるのではないかと考える。

さて現状における博物館の「一般の利用」への供し方は、些か偏重に過ぎてはいないだろうか。館の計画により展示されたものは見ることはできても、利用者が自らの意志で資料を撰択し得るかどうかということになると、疑問であ

る。博物館は見せる施設であると同時に、積極的に利用させる施設であるべきではなからうか。ところが館によっては写真撮影すら禁止しているところがある。これは一体どういう考えからか。

資料の性格上、現物を直接見せることの困難さはあるが、少くとも資料室を公開し、索引によってデーターや写真を提供する程度の事は可能な筈である。

更に、博物館相互の協力を得れば、各地の資料の所在やデーターを一箇所で得ることも不可能ではあるまい。

共通の資料分類法もなく、自館の資料整理にも苦しむものにとって、今後の参考に供するとて同館の分類法と資料整理法の一部を紹介された。

## 三 県内 ニュース

### 春慶会館へどうぞ

江戸・明治・大正・昭和各時代の春慶塗を一堂に展示し、飛騨の大自然の中から産み出された伝統工芸の真髄を伝える春慶会館がオープンしています。高校生以上100円、小中生50円、30名以上団体割引あり。高山市神田町、西小学校北隣り、TEL 0577-32-0662

### 浅見化石会館長 浅見薫氏 日本顕彰会より表彰さる

浅見化石会館長 浅見薫氏は、去る昭和48年10月26日、東京ホテル大谷にて、日本顕彰会より、社会貢献者として表彰され、式には娘さんの昭子氏が代理としてご出席されました。常陸宮ご夫妻をはじめ約1000名の出席者の中で、「黙々と世のため人のために貢献されている方々が全国から383名」表彰されました。

今後のご発展をお祈りするとともに、広くご紹介申し上げ、ともにお喜び申し上げます。

### 岐阜県博物館 展示基本計画できる

上記計画が、昨年暮に発表されたので、以下に紹介する。県民の財産であり、岐阜文化のパロメーターとされ、また文化財や自然の保護・保全センターでもある博物館が、後世に悔いを残さないためにも、意見や希望を開設準備室(TEL. 0582-72-1111内線2634~5)へ申し出ましょう。

県行政・各学界・研究諸団体・県民各層など、ひろく万人の衆智を糾合し、具体的内容を提示しつつ、基本計画は鍛えられ、深化され、あるいは手直しされ、実現への土台固めがされるべきであるが、その作業の場が設けられていることをまだ聞かない。地域に生きる県内の各博物館及び類似施設等と、真に有機的に生きて結びついた県の中央博物館としてのあるべき姿、それを確立するためにも、建設的な意見を出そう。

### ※ 事務局より ※

★ 寄贈文献 郷土研究・岐阜2号 岐阜県郷土資料研究協議会より。奥濃民俗広75. 77. 78. 79. 80 以上5冊。



# 岐阜県博物館

## (付) 展 示 基 本 計 画

### I 総 論

県立博物館としての使命と役割りを考え、「岐阜県博物館建設基本構想」の「4.展示計画」にもとづき、郷土の過去と現状を人文・自然の両分野にわたって多面的にとりあげ、県民をはじめ、広く他県の人びとが、本県の歴史と自然について、知識と理解を深めることができるように展示する。

#### 1 基本方針

- (1) 生涯教育の場として、幅広い層に親しめる展示とする。
- (2) 単なる資料の羅列ではなく、ストーリーのある展示とする。
- (3) 総花的な展示を避け、各時代の特色やテーマの本質をとらえた展示とする。
- (4) できる限り実物資料を展示するが、さらに図表・模型等多種類の資料を活用する。
- (5) 視聴覚機器などを取り入れて、見るものに強く訴えるよう配慮する。
- (6) 解説等は義務教育終了程度の知識で、じゅうぶん理解できるものとする。

#### 2 展示部門

- (1) 常設展示は総合展示と課題展示とし、それぞれ人文・自然の二部門に分ける。

総合展示はだれにも親しめるよう平易な展示を心がけ、課題展示は内容において、前者よりやや高度のものとする。

それぞれの主題と内容は次のようにする。

- (ア) 人文総合展示 主題「郷土の歴史」

先史より現代に至るまでの歴史の流れと、各時代の特色をわかりやすく展示する。

- (イ) 自然総合展示 主題「郷土の自然とそのおいたち」

郷土のおいたちと自然の現状を生感的にわかりやすく展示する。

- (ウ) 人文課題展示 主題「郷土の美術工芸」

特色ある郷土の美術工芸を部門別、時代別に展示する。

- (エ) 自然課題展示 主題「郷土のさまざまな自然」

特色ある郷土の自然物や事象をテーマ別に系統的に展示する。

- (2) 特別展示は特別展示室を使い、例えば「郷土の近代美術」など、特定の企画とテーマを設けて、3～6カ月の短期展示を計画する。

- (3) 児童学習室は主として小中学生を対象とするもので、展示による学習の発展として、映像展示や製作用具をみずから活用することにより、郷土について体験的に学習させる。

## Ⅱ 総合展示「郷土の歴史」

### 1 展示の意義と目的

岐阜県は国土のほぼ中央に位置し、3,000m以上の山地から海拔0mの低地までの広い地域にまたがっている。昔から飛山濃水の地といわれ、この自然環境の中で、先人たちは幾多の貴重な歴史遺産を築きあげてきた。こうした先人たちの遺産である貴重な文化財に接することは県民の強い願いである。展示はこの願いにこたえとともに、あわせて県民の文化意識の向上および教育・学術文化をいっそう高め、岐阜県の明日への発展の原動力となるようにする。

### 2 展示の中心テーマ

飛山濃水の自然のなかで営まれた郷土のあゆみを中心テーマとする。

### 3 展示のねらい

- (1) 先人が築きあげてきた郷土の歴史が展観できるようにする。
- (2) 過去の歴史を知るだけでなく、展示をとおして学ぶ意欲をよびおこすような工夫をする。

### 4 展示の方法

- (1) 厳密な考証と研究にもとづく正確性を期し、平易な表現方法を用い、しかも米館者に歴史との出会いの感動をいだかせるようにする。
- (2) 表現方法は実物資料とあわせ、模型、模写、模造品等を用いて効果的に表現する。さらに感動と迫力を与えるような視聴覚的技法をも積極的にとり入れるようにする。

### 5 展示テーマ

大テーマ	中テーマ	小テーマ	
I 濃飛のあけぼの	郷土のあゆみ		
	1	土器のないくらし	a 洞窟の生活
	2	土器をつかうくらし	c 中野遺跡
			d 縄文時代の土器
	3	土地を耕やすくらし	e 弥生時代の生活
			f ムラの成立
	4	美濃・飛騨のクニグニ	g 豪族の基
h 豪族の生活と文化			

大テーマ	中テーマ		小テーマ	
I 飛騨国 の成長	1	律令制のひろがり	a	東山道と関所
		b	美濃国国府のはたらき	
		c	美濃の国分寺	
	2	くずれゆく土地支配	d	条里制から荘園
	3	中央文化の流れ	e	濃飛の仏像
	II 武士の 支配と文化	1	武士の支配	a
b				三カ国守護土岐氏
c				守護代斎藤氏
d				飛騨の国国と守護
2		ひろがる地方信仰	e	泰澄と白山信仰
			f	高賀権現
3		武士の文化	g	土岐氏と禅宗
			h	武将と歌道
			i	中世の文化財
III 統一への 足場	1	戦国の武将	j	下剋上の風潮
			k	斎藤三代
	2	統一への道	l	信長と岐阜
			m	関ヶ原の合戦
IV 小領主の 分立	1	入りまじる領主	a	小藩支配の美濃
			b	天領飛騨
	2	領主と農民	c	年貢と五人組
			d	村と農民
			e	百姓一揆
	3	水になやむ農民	f	木曾三川と輪中
			g	宝暦の治水
			h	用水と井組

大テーマ		中テーマ	小テーマ	
Ⅴ 小領主の分立	4	旅と荷の動き	i	中山道と宿場
			j	舟運と湊
			k	商人の町
	5	新しい文化	l	美濃派と俳諧
			m	大垣藩の蘭学
n			飛騨・木曾路の国学	
Ⅵ 郷土の百年	1	岐阜県の誕生	a	高山県と梅村騒動
			b	岩村藩の廃仏毀釈
			c	笠松県(岐阜県)と新政策
	2	県政の発展	d	小岐県令と県議会
			e	三川分流工事
			f	濃尾震災と西別院事件
	3	教育・文化の普及	g	教科書の変遷
			h	文化勲章の受賞者たち
			i	学校生活のうつりかわり
	4	産業・生活の変遷	j	風俗のうつりかわり
			k	産業の近代化
			l	戦時の体験
	5	のびゆく郷土	m	岐阜県の将来
			n	知事のことば

## Ⅱ 総合展示「郷土の自然とおいたち」

### 1 展示の意義と目的

岐阜県の歴史をはぐくむ郷土の自然をよく知り、県民と自然の関係を正しく認識させる。そして、県民がかけがえのないこの土地を豊かな郷土とする努力をおこたらないようにし、よりよき自然の中で、自然と調和した人間生活のあり方を考える場とする。

### 2 展示の中心テーマ

郷土の自然とそのおいたち、および人と自然の関係を中心テーマとする。

### 3 展示のねらい

- (1) 岐阜県の自然の大略がつかめるようにする。
- (2) 自然界の秩序ある調和の姿を正しく知るだけでなく、みずからが考える場としての展示とする。
- (3) すずんで屋外の自然にふれ、問題意識を持って研究しようとする意欲の湧く展示とする。

### 4 展示の方法

- (1) できるだけ自然のままの姿を再現する。
- (2) 視聴覚機器をできるだけ導入して理解を容易にし、光や音によって感動と迫力を与え、展示の目的をじゅうぶん果すようにする。

### 5 展示テーマ

大テーマ	中テーマ	小テーマ
(導入展示)	デスモスチルス	
Ⅰ 自然 のお いた ち	1. 地球の誕生	1. 隕石が語ること 2. 空と海の生成 3. 生命の起源
	2. 日本の基盤	1. 礫岩のなぞ 2. 日本の土台石
	3. 暖かい海	1. 最古の化石 2. 二疊紀の海 3. 地下資源の生成

大テーマ	中テーマ	小テーマ
	4. 中生代の陸と海	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 海の断片</li> <li>2. 手取湖のほとり</li> </ol>
	5. 渡飛の火山活動	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. はげしい噴火</li> <li>2. 当時の噴出口</li> <li>3. 花崗岩と鉱物</li> </ol>
	6. 新しい世界	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 古瀬戸内海の岸辺</li> <li>2. 東海湖の沼地</li> </ol>
	7. 氷河時代	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 美山の動物たち</li> <li>2. 火山の誕生</li> <li>3. 段丘と平野の形成</li> </ol>
Ⅱ 自然のすがた	1. 山の自然	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 飛騨の山山</li> <li>2. 山の植物</li> <li>3. ブナの原生林</li> <li>4. 高層<b>湿原</b></li> <li>5. 豊富な温泉</li> <li>6. 鍾乳洞の自然</li> </ol>
	2. 川の自然	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 美濃の河川</li> <li>2. 長良川の上流</li> <li>3. 長良川の中流</li> <li>4. オオサンショウウオ</li> <li>5. 長良川の下流</li> <li>6. 油沼の自然</li> <li>7. 地下を流れる水</li> </ol>
Ⅲ 自然とひと	1. 自然のはたらきと利用	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 太陽熱と水</li> <li>2. 河川のはたらき</li> <li>3. 森林の役割</li> <li>4. 天敵の利用</li> </ol>
	2. 変えられた自然	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 気象による災害</li> <li>2. 地震による災害</li> <li>3. 自然の破壊</li> <li>4. 河川の汚れ</li> <li>5. ギフチヨウ</li> <li>6. 野鳥の減少</li> </ol>

## Ⅳ 課題展示「郷土の美術工芸」

### 1 展示の意義と目的

飛山渡水の自然風土のなかで先人たちが優れた美術工芸を生みだし育ててきた。これらの文化財の展示を通して県民の美術工芸への関心を高めるようにする。

### 2 展示の中心テーマ

本県の優れた美術品と特色ある工芸品の展示をする。

### 3 展示のねらい

- (1) 本県の優れた美術工芸品を鑑賞できるようにする。
- (2) ただ単に作品を鑑賞するだけでなく、さらに美術品のうちに宿されている先人の創意を考える場とする。

### 4 展示の方法等

- (1) 本県の特色を示す古美術や美濃焼・刀剣などの美術工芸を課題として実物資料を中心に体系的に分類し展示する。
- (2) 中テーマは、一定期間を置いて交替し、バラエティーに富んだ展示をする。
- (3) 解説は、作品の鑑賞のさまたげにならないように、一カ所にまとめ、解説スペースにおいておこなう。

### 5 展示テーマ

大 テ ー マ	中 テ ー マ	小 テ ー マ
美術工芸Ⅰ	郷土の古美術 (奈良時代-江戸時代)	彫刻 絵画
美術工芸Ⅱ	美濃焼	桃山期の美濃焼 江戸期の美濃焼 明治期の美濃焼
美術工芸Ⅲ	美濃・関の刀剣	美濃伝の刀剣 関伝の刀剣

## V 課題展示「郷土のさまざまな自然」

### 1 展示の意義と目的

特定のテーマのもとに、総合展示よりやや高度の展示をすることにより、自然に対し、より深い関心を持つ観覧者の要求にこたえうるようにする。

### 2 展示の中心テーマ

岐阜県の特徴ある動物・植物・鉱物や、今日問題になっている事象を中心に展示する。

### 3 展示のねらい

- (1) 個々のテーマごとに、一応まとまりのある知識が得られるようにする。
- (2) 観覧者がみずから問題をみつけ、解決の方法を見つけていく態度を培う展示とする。

### 4 展示の方法

- (1) 学術的研究にもとづき、わかりやすくまとまった展示とする。
- (2) 解説指導により討論の場となるような展示とする。

### 5 展示テーマ

大 テ ー マ	中 テ ー マ	小 テ ー マ
I 郷土の自然概観		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 地 勢</li> <li>2. 地 質</li> <li>3. 気 候</li> <li>4. 植 生</li> </ol>
II 生物の系統樹		<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 動物界</li> <li>2. 植物界</li> </ol>
III 郷土の地下資源	1 いろいろな鉱石	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 金属原料の鉱石</li> <li>2. 非金属原料の鉱石</li> <li>3. 原子力燃料の鉱石</li> </ol>
	2 鉱床の分布	地下の貯蔵庫
IV 郷土の岩石	1 岩石とその利用	<ol style="list-style-type: none"> <li>1. 火成岩</li> <li>2. 堆積岩と地層</li> <li>3. 変成岩</li> </ol>
	2 岩石の変化	岩石はめぐる



大 テ ー マ	中 テ ー マ	小 テ ー マ
V 郷 土 の 天 然 記 念 物		1. 天然記念物の分布 2. 自然の造形 3. 県の貴重な動物 4. 県の貴重な植物
VI 県の花、県の木、県の鳥	1 県の花レンゲソウ	1. 制定のいわれ 2. レンゲソウの花 3. 田とレンゲソウ 4. ミツバチ
	2 県の木イチイ	1. 制定のいわれ 2. イチイの森 3. イチイの木 4. 一位細工
	3 県の鳥ライチョウ	1. ライチョウの生息地 2. ライチョウの生態 3. ライチョウの分布 4. ライチョウの保護
VII ウ と ア ユ	1 ウ	1. 鶺鴒 2. ウの生物学
	2 アユ	1. アユの生物学 2. アユの餌 3. アユの繁殖と放流 4. アユの飼育
VIII 野 鳥 の 保 護		1. 庭に野鳥を 2. 貴重な記録 3. この鳥は？ 4. 窓外施設
IX 郷 土 の カ タ ッ ム リ た ち		
X 郷 土 の 植 物		
XI こ れ か ら の 岐 阜 県		どう考えますか？
XII 百 年 公 園 内 の 植 物		